3-1-1 不破さんと志位さんの「共産党 100 年」史
――科学的社会主義の大地に「資本主義発展論」の種を蒔く――

目次

Ⅰ、民主主義と社会主義を「水」と「油」のように捉えて、資本主義内での「民主主義」の実現に汲々とし、資本主義の矛盾の暴露を放棄する
Ⅱ、根拠もないのに米国を美化
Ⅲ、階級社会が世界を覆っていることを見ない世界観
Ⅳ、中国共産党とのたたかいをめぐる〝党史〟と〝レーニン〟の改竄
Ⅴ、「分配」をめぐる〝党史〟と〝レーニン〟の改竄
Ⅵ、資本の行動と現実の経済を見ない、資本を免罪し全ての罪を政治になすりつける「新自由主義」暴走論
Ⅶ、「60年代の初心」を捨て去り、「資本主義発展論」の種を蒔く不破さんと志位さん

はじめに

☆「共産党」の志位委員長は、1966 年以降で最低水準の党勢（党員約 26 万、機関紙読者約 90 万）で創立百周年をむかえた「共産党」の「日本共産党 100 年の歴史と綱領を語る」と題した「記念講演」の「結び」で、「1960 年代の初心にたって、党づくりに取り組む」と言いました。

このページの最後の項で改めて触れますが、〝1960 年代の初心〟を、最近の二十年間で、ことごとく捨て去ってしまった不破さんとその追従者である志位さんが「1960 年代の初心にたって、党づくりに取り組む」と言のですから、〝ペテンの極み〟と言ったら表現がきつすぎるとお叱りを受けるかもしれませんが、何ともいいようがありません。

不破さんとその追従者である志位さんが、どのように〝1960 年代の初心〟を捨て去り、科学的社会主義の大地に「資本主義発展論」の種を蒔き、党員と党の支持者を惑わせてきたのか、「記念講演」の内容に沿って、みなさんと一緒に見ていきたいと思います。

１、民主主義と社会主義を「水」と「油」のように捉えて、資本主義内でのカッコ付きの「民主主義」の実現に汲々とし、資本主義の矛盾の暴露を放棄する

☆志位さんは、独占資本主義の支配を打ち破るたたかいの〝革命の性格〟について、「民主主義革命ととらえるか、社会主義革命ととらえるか」という問題であると、共産党員なら誰でも認めることを述べ、だから、「独占資本主義――大企業・財界の横暴な支配をただすたたかいが、社会主義の課題でなく、民主主義の課題であることは、今では論じる必要もない」と言って胸を張ります。

しかし、待って下さい。「民主主義革命」か「社会主義革命」かという問題から、なぜ、「社会主義の課題」と「民主主義の課題」とを「水」と「油」のように対立させなければならないのか。レーニンも、「全人民の民主主義的管理を組織する」ことを通じて〝民主主義の完全な発展〟を図ることにより社会を「社会主義的経済的有機体に組織する」ことを目標にして社会主義社会の建設を進めましたが、「民主主義の課題」と「社会主義の課題」とは分かちがたく結びついています。

そもそも日本共産党の「反独占」の民主主義革命とは、労働者階級を「革命の指導階級」とする民族民主統一戦線を「革命の原動力」（教育要綱：第一課日本革命の性格）としており、「独占資本主義の段階にある日本での反帝反独占の民主主義革命は、客観的には社会主義革命へと移行する基礎をきりひらく役割をはたしうる」（講師資料 No1：中央委員会教育局）性格のものです。つまり、独占資本の「産業の空洞化」などを規制し〝経済は国民のため、社会のためにある〟という〝民主主義〟の社会を実現するたたかいは社会主義日本に、シームレスにつながるものです。（この考えが「1961 年綱領」以来二十一世紀になるまで日本共産党が堅持してきたものであることは、あとでふれます。）

しかし、不破さんと志位さんの言う「民主主義」は違います。志位さんが、選挙の街頭演説で「自民党政治を大本から変えるという大目標を背負っている。ただ、今度の選挙でそれを目指すのはちょっと早いですね」（「日経」志位委員長の東京都三鷹市での街頭演説）というように、不破さんと志位さんの言う「民主主義」は、資本主義のもとで、資本主義が容認する「生活防衛のためのバリケード」としてのカッコ付きの「民主主義」であり、「自民党政治を大本から変えるという大目標」を実現する本当の〝民主主義〟ではありません。

志位さんが「社会主義の課題」と「民主主義の課題」とを「水」と「油」のように対立させるのは、資本主義の矛盾を暴露し「自民党政治を大本から変えるという大目標」を国民に明らかすするという科学的社会主義の思想を捨てて、「資本主義発展論」（＊）の上で「共産党」をコントロールするための方便です。

志位さんが科学的社会主義の思想の持ち主であるならば、ここで語るべきは「反独占」の民主主義革命における〝民主主義〟の意味と、日本共産党がめざしてきた〝社会主義〟と民主主義革命における〝民主主義〟との関わりです。

（＊）詳しくは、ホームページ 4-19「☆不破さんは、マルクスが 1865 年に革命観・資本主義観の大転換をしたという、レーニンも気づかなかった大発見を、21 世紀になっておこない、マルクスの経済学をだいなしにしてしまった。」を、是非、お読み下さい。

２、根拠もないのに米国を美化

☆志位さんは、「〝アメリカの実際の政策や行動をもとにアメリカをとらえる〟という」〝真っ当な「姿勢」〟を「発展させて」、2004 年の党大会で「将来、アメリカの侵略的な政策と行動が変化することがありうるという解明を行いました」と言います。

実際の政策や行動をもとに、米国を「まぎれもなく帝国主義である」と断言する志位さんが、〝実際の政策や行動をもとにとらえる〟という認識の「姿勢」を「発展」させると、なぜ、「将来、アメリカの侵略的な政策と行動が変化することがありうる」とアメリカ帝国主義の将来を占うことができるのでしょうか。このように、何の根拠も示さずに断言することを、世間では美化といいます。私たちは、実際の政策とそれにともなう行動により米国が「侵略的な政策と行動」を変化させたとき、米国は帝国主義国でなくなったと評価すればいいんです。

志位さんは、「変化」の例らしきもの（？）として「オバマ米大統領が、プラハの演説で、『核兵器のない世界』を米国の国家目標にすると言明」したことをあげ、そして、この「オバマ米大統領の言明」が「その後うちすてられた」ことを述べています。

オバマ米国大統領が、プラハで「核兵器のない世界」の演説をしたとき、米国は核の脅威で世界を脅し、核兵器も通常兵器も開発の手を緩めず、「政策と行動」の変化などまったくありませんでした。事実を見ずに、根拠もなしに、「将来、アメリカの侵略的な政策と行動が変化することがありうる」など予断と偏見をもって米国を美化してはいけません。

米国を美化しなくても、科学的社会主義の思想の持ち主であるならば、例えリップサービスと思えるようなことであっても言質を取って、世界平和に貢献する行動を積極的に行なえばいいんです。米国を美化し過ぎると CIA のまわし者と疑われますよ。

３、階級社会が世界を覆っていることを見ないノー天気な世界観

☆志位さんは、2004 年の党大会の「綱領第三章第九節」の提案報告で、「一握りの大国が世界政治を思いのまま動かしていた時代は終わり、」「一握りの大国から、世界のすべての国ぐにと市民社会に、国際政治の主役が交代した――ここに二一世紀の世界の希望ある新しい特徴がある」と、主観的で誤ったことを言っていますが、この「記念講演」の「野党外交と世界論」というところでも、まったく同じことを言っています。

しかし、「一握りの大国から、世界のすべての国ぐにと市民社会に、国際政治の主役が交代した」というのは、現実を無視した真っ赤なウソです。

世界では、今、軍事力 1 位の米国と 2 位のロシアの両核超大国が軍事を巡って、経済力 1 位の米国と 2 位の中国が経済・技術覇権を巡って、米国の覇権を維持し強化するための攻撃が強まるなかで、火花を散らしています。そして、いまでも圧倒的な経済力と軍事力を武器に「国際政治」の様々な分野で覇権国家として主役を演じているのがアメリカ帝国主義であることは、だれが見ても明らかです。そして、日本がその従属的な同盟者であり、米国の帝国主義的な行動の一角を担わされていることもまた明らかです。希望的願望で虚勢をはるのは、展望のもてない弱虫のやることです。この現実を見ず、「一握りの大国が世界政治を思いのまま動かしていた時代は終わり」などと呑気なことをいって、願望で現実を塗り替えたら帝国主義者の思うつぼです。

そしてこの誤った不破・志位路線の「世界論」における最大の誤りは、現在の世界がグローバル資本が支配する階級社会であり、科学的社会主義の党は世界の労働者階級と連帯して資本主義社会を変えるために力を尽くさなければならないという観点が欠落しているということです。

なぜ、そうなるのか？

☆なぜ、そうなるのか？それは、不破さんと志位さんが 2004 年の党大会で綱領を変えてしまったからです。

「2004 年不破綱領」は、労働者階級の国際連帯の意義もその運動の立ち向かうべき相手も明らかでない、科学的社会主義の党の綱領としては致命的な欠陥をもつものとなりました。（＊）そして、「2004 年不破綱領」を「発展」させた「2020 年『新綱領』」は、「民主主義と人権を擁護し発展させる闘争」や「気候変動を抑制し地球環境を守る闘争」など表面に浮かび上がった「国際連帯の諸課題」なるものを列挙しますが、その原因も、それに対して誰がどのように「連帯」するのかの条件や可能性も示さず、「世界史の進行には、多くの波乱や曲折、ときには一時的な、あるいはかなり長期にわたる逆行もある」と、お決まりの、責任放棄の、「山あり谷あり」論を述べたあと、「科学的社会主義の党」を装

おうとして、取って付けたように何の理論的な脈絡もなく、「帝国主義・資本主義を乗り越え、社会主義に前進することは、大局的には歴史の不可避的な発展方向である」と「帝国主義・資本主義」や「社会主義」という宗教でいえば「地獄」や「天国」でもあらわすかのような言葉を散りばめて、最後に、信じるものは救われるといわんばかりに、「大局的には歴史の不可避的な発展方向である」と〝不破教の経典(「綱領」)〟を結ぶだけのものとして、見事に完成しました。

このように、現在の「共産党」の「綱領」の「国際連帯の諸課題を主題」としているという「節」には、〝資本〟と〝労働者階級〟という資本主義的生産様式の社会の〝二大主役〟がまったく出てきません。主役なしに「国際連帯の諸課題」という「主題」を解決しようというのですから、「多くの波乱や曲折」どころか何が起きるかわかるはずがありません。それでも、「帝国主義・資本主義を乗り越え、社会主義に前進することは、大局的には歴史の不可避的な発展方向である」などというのですから、大した「信念」です。

（＊）詳しくは、ホームページ 3-3-1「『2004 年綱領』にみる不破哲三氏の転落の証明」を、是非、参照して下さい。

グローバル資本とのたたかいが万国の労働者を団結させ未来を拓く

☆世界に災いを振りまいているのは、グローバル資本とその行動をサポートしている資本主義国家です。資本主義国家は、〝民主主義〟を少数者が多数者を支配するためのカッコ付きの「民主主義」に歪めて矮小化し「自由な契約」で人権を奪って搾取しており（＊）、グローバル資本は一層の資本蓄積を求めて母国の労働者を捨て、産業の空洞化を進めることでその国の労資の力関係を資本優位にして労働者に低賃金を押しつけ、進出先の資本主義の発展が遅れた国ぐににおいては、労働者を低賃金で搾取し、知財権なる私的財産権で収奪し、地球環境を破壊しています。海外での搾取を円滑に進めるために、グローバル資本は、資本主義の発展が遅れた国ぐにに対し、かれらの母国の経済的優位性、軍事的優位性を武器に彼らに有利な条件を「国際ルール」として押し付けさせます。この自分たちに都合の良い「国際ルール」を先頭に立って作り押し付けてきたのがアメリカ帝国主義です。

このような経済状態とそれに対応する政治的な状態があるからこそ、先進資本主義国の労働者も資本主義の発展が遅れた国ぐにの労働者も、団結して闘わなければならないし、団結して闘うための条件があるのです。

しかし、現在の「共産党」にはそのような観点がまったく欠けています。〝万国の労働者は団結せよ!!〟という労働者階級と労働者党にとって非常に大切な、欠いてはいけない、国際連帯の精神と実践が、まったく、欠けています。だから、この「記念講演」からも、そのような思想のかけらすら見つけることはできません。

（＊）詳しくは、ホームページ 2-1-7「〝社会のあり方〟と〝自由と民主主義〟の現在・過去・未来」を、是非、参照して下さい。

※科学的社会主義の党のグローバル資本とのたたかいかたの詳しい説明は、ホームページ 2-5「国際社会とどう向き合うか」及びホームページ 2-1-2「「資本」のための経済から「人間」のための経済へ」を、是非、参照して下さい。

４、不破さんの中国共産党とのたたかいをめぐる〝党史〟の改竄を追認するのか？

☆志位さんは、日本共産党が毛沢東盲従一派とたたかったときの〝革命論〟を〝マルクス

・エンゲルス・レーニンの革命論〟といわずに「マルクス、エンゲルスの革命論」と歪曲し、続けて、不破さんが『レーニンと「資本論」』という著書で、レーニンが『国家と革命』において「国家論・革命論にかかわる重大な理論的な誤りを犯している」と主張していることについて、「特別の重要性を考慮して、常任幹部会で集団的にその内容を確認した」ことを述べて、日本共産党が毛沢東盲従一派とたたかった当時からレーニンの革命論に誤りがあるかのような認識をもっていたかのような印象を、私たちに、与えています。

志位さんは、不破さんが「白」を「黒」と言えば、「白」が少しでも「黒」く見えるように照明を暗くすることが自分の努めとでも思っているのでしょうか。日本共産党が毛沢東盲従一派とたたかった当時に光を当て、しっかりと、見てみましょう。

不破さんの〝党史〟の改竄

☆不破さんは、「赤旗」に連載させ、出版までさせた『「資本論」刊行150年に寄せて』という文章の⑨「マルクスの未来社会論(1)」のむすびの「自主独立の立場でマルクスの本来の理論を解明」という小見出しの――自分の誤りを自慢する――項で次のように述べます。

「革命論についてのレーニンの誤解については、1960年代に中国の毛沢東一派との闘争のなかで、レーニンの誤解をただし、多数者革命論にこそマルクスの理論的到達点があることを明らかにしました。」と。

しかし、これは真っ赤なウソです。「共産党」が変節したにもかかわらず、国会前等で、歯を食いしばって頑張っている多くの高齢者は、青春時代に「４・29論文」や「10・10論文」を読み、マルクス・エンゲルス・レーニンの思想と毛沢東の思想の違いを再認識し、日本共産党の路線の正しさに確信を持って活動してきた人たちです。この人たちのエネルギッシュな活動が、70年代から80年代の共産党の組織活動の黄金時代を築きました。この人たちが、不破さんの“共産党は「４・29論文」や「10・10論文」で「レーニンの革命論の誤解をただした」”という趣旨の言葉を聞いたら、これまで私が〝不破さんの誤った主張〟を指摘してきたことに「眉にツバして」見ていた人たちも、その評価を変えること請け合いです。

不破さんは、これまでも、一つの文章を二つに分けてその間に自分の主張を入れたり、推測をもとにその推測に依拠して相手を論破したり、いろいろなテクニックを駆使して自らの尊大さを示そうとしてきました。不破さんが、21世紀になって、マルクスの本当の「恐慌論」を発見し、「激しい理論的衝撃」を受けて、資本主義の見方も、革命の見方も変わったのは本人の自由ですが、今度は、それに合わせるために、共産党の過去の正しい主張までも無いことにして、「レーニンの革命論の誤解をただした」などと言い出してしまったのです。このとき、党本部の中にこれを止める人は一人もいなかったんでしょうか。「貴の岩」が暴力を振るわれたときだれも止めなかったように、みんな見ているだけだったのでしょうか。レーニンの革命論に誤りがあるかのような不破さんの主張を確認するまえに、不破さんの真っ赤なウソを確認すべきではなかったのか。

「４・29論文」とは

☆「４・29論文」とは、正式には「極左日和見主義者の中傷と挑発」というタイトルの『赤旗』評論員論文の略称で、1967年4月29日の『赤旗』に発表されたので一般に〝よんにいきゅう論文〟と呼ばれています。論文は、日本共産党の綱領路線が、「暴力革命」を「日

本における革命のただ一つの道であることをみとめず、革命の平和的な発展の可能性」を革命の発展の「ひとつの可能な展望としてみとめている」ことについて、当時の中国共産党とその盲従分子が「これこそ『暴力革命がプロレタリア革命の普遍的法則である』というマルクス・レーニン主義の原則にたいする裏切りであり、ブルジョア議会を美化して『議会による革命』をとなえた第二インターナショナルの修正主義路線への転落だ、という」攻撃をしてきたことに対し、マルクス・エンゲルス・レーニンの著作とその時代背景を示して、マルクス・レーニン主義(＝科学的社会主義)の旗を守った傑作論文です。

「４・29論文」でのレーニンの思想の評価

☆レーニンは、ロシア 10 月革命の約半年まえの 1917 年 4 月 9 日の『プラウダ』で、労働者代表ソヴェトが「権力となるためには、自覚した労働者は、多数者を味方に獲得しなければならない。大衆にたいする暴力が存在しないあいだは、これ以外に権力に到達する道はない。われわれは、ブランキ主義者ではなく、少数者による権力の奪取を支持するものではない」(第二十四巻 P23-24)と言っています。

つまり、レーニンは、大衆にたいする暴力が存在しないあいだは、労働者と農民の大多数の意識と意志を直接に表現する「ただ一つ可能な革命政府の形態」(同前 P5)である労働者代表ソヴェトへ多数者を味方に獲得する以外に権力に到達する道はないと考えていました。

「４・29論文」は、この明快な文章を引用してはいませんが、レーニンの当時の思想について、まったく正しい評価をしています。

論文は、まず、〝議会の評価〟について、「レーニンは、議会闘争を軽視しこれに否定的態度をとるこのような見解を、『反議会主義』と特徴づけ、マルクス主義とは無縁な『左翼』小児病的見解の典型として、徹底的に批判した」と、レーニンを擁護します。そして、〝「暴力革命唯一論」の誤り〟について、不破さんが『「資本論」刊行 150 年に寄せて』で引用した『国家と革命』の部分も引用しながら、次のように述べます。

「1917年の今日」における情勢の変化によって、レーニンは「イギリス、アメリカなどについてのマルクス、エンゲルスの留保はすでに意味を失ったとして、暴力革命の不可避性を、より一般的なかたちで主張した。

『ブルジョア国家がプロレタリア国家(プロレタリアートの独裁)と交代するのは、「死滅」の道を通じては不可能であり、それは、通例、暴力革命によってのみ可能である』(レーニン「国家と革命」、全集二十五巻四三二ページ)

しかし、レーニンは、こうした歴史的情勢のもとでさえ、プロレタリア国家の樹立は『通例』暴力革命によってのみ可能だとのべながらも、一定の条件の組みあわせのもとでは、暴力革命の不可避性に『例外』がうまれうることをけっして否定しなかった。実際、1917年のロシア革命の過程で、革命の平和的発展の可能性がうまれたときには、レーニンは、だれよりもさきにこれをとらえて、この歴史上『きわめて貴重な可能性』(「妥協について」、全集二十五巻三三五ページ)を実現するために、必要なあらゆる努力をおしまなかった。」と。

そして、論文は、現在の不破さんたちの、マルクス・エンゲルス・レーニンに対する誹謗・中傷のやり方――情勢抜きに言葉尻をとらえるやり方――を見透かしたかのように、「だが、安斎(反党対外盲従分子の一人――青山の注)のこの努力は、『具体的な情勢の研

究を引用文と経文読みにすりかえ』るかれの教条主義の実例として役だつにすぎない」と述べています。不破さんと安斎氏との違いは、安斎氏が「引用文」を矮小化して正しい「経文」だと言い、不破さんは、「引用文」を矮小化して誤った「経文」だと言い、二人とも情勢を無視して科学的社会主義の思想を否定することです。

次に論文は、不破さんが「レーニンの荒れた時期」と「反党対外盲従分子」なみにレーニンを歪曲している時期のレーニンについて「『勤労者の多数者の共感』が投票によって証明される場合がありうることを、けっして否定していないのである」と断言しています。

なお、私も下記の「ページ AZ-2-3」（＊）で、不破さんが「レーニンの荒れた時期」と誹謗している時期に開かれた、共産主義インタナショナル第三回大会（1921 年 6 月 22 日－7 月 12 日）の演説の一部を紹介して、レーニンが、1917 年 4 月の時点でも 1921 年 6 月の時点でも、革命の平和的発展の可能性についての考えに揺らぎがないことを指摘していますので、是非、お読み下さい。

以上、「4・29論文」を見てきましたが、「10・10論文」（「今日の毛沢東路線と国際共産主義運動」1967・10・10「赤旗」）にもマルクス・エンゲルス・レーニンを誹謗するような文章はありません。

また、『日本共産党の六十年』も当時の闘いについて、「毛沢東盲従反党分子とのたたかいをゆるめず、評論員論文『極左日和見主義者の中傷と挑発』（『赤旗』一九六七年四月二十九日）などを発表して、高度に発達した資本主義国日本での議会活動の役割を否定するかれらの反議会主義や中国式『人民戦争』論を日本に機械的に導入しようとする極左冒険主義の挑発的くわだてをするどく暴露し、党綱領の見地を擁護してたたかった。」と述べ、マルクス・レーニン主義（科学的社会主義）の正しい認識の仕方と思想に立っており、マルクス・エンゲルス・レーニンを誹謗するような文章は見あたりません。

このように、不破さんが「革命論についてのレーニンの誤解については、1960年代に中国の毛沢東一派との闘争のなかで、レーニンの誤解をただし、多数者革命論にこそマルクスの理論的到達点があることを明らかにしました」と言うのは、真っ赤なウソで、輝いていたころの日本共産党の歴史の捏造そのものです。

（＊）より詳しくは、ホームページ AZ-2-3「『資本論』刊行 150 年にかこつけてマルクスを否定する不破哲三氏（その 3）」を、是非、参照して下さい。

マルクス主義の考察のしかた

☆不破さんの「情勢抜きに言葉尻をとらえて批判する」方法を批判し、マルクス主義の考察のしかたについて、レーニンは、イネッサ・アルマンドへの手紙で次のように述べています。

「一般的に言って、あなたはなんだかすこし一面的、形式主義的に論じているようにおもわれます。『共産党宣言』から**一つの句**（労働者は祖国をもたない）を引用して、それをまるで無条件に適用し、民族戦争を**否定するところまで**行こうとしています。

マルクス主義の全精神、その全体系は、おのおのの命題を、（α）歴史的にのみ、（β）他の諸命題と関連させてのみ、（γ）歴史の具体的経験と結びつけてのみ、考察することを要求しています。

祖国とは歴史的な概念です。民族的抑圧を打倒するためにたたかう時代、もっと正確に言えば**時機**における祖国と、民族運動がはるか過去のものとなった時機の祖国とは、別の

ものです。祖国と祖国擁護とについての命題を、「三つの型の国家」（自決についてのわれわれのテーゼの第六項**）にあらゆるばあいに一律に適用することは**でき**ません。」（第35巻『111イネッサ・アルマンドへ』P262～263、1916年11月30日に執筆）（＊１）

不破さんは、当時のブルジョアジーの未熟な経済運営のもとでマルクスが〝恐慌〟を政治的変革の最も強力な槓杆になるというと、マルクスは誤った「恐慌＝革命」説に立っていたと言い（＊２）、エンゲルスがプロレタリアートとブルジョアジーの対立が資本主義の発展のなかで明るみに出るというと、不破さんは、「プロレタリアートとブルジョアジーの対立」は「資本主義の発生の時点から」あるのにエンゲルスが事態の発展のなかで明るみに出るというのは間違っていると、自分の理解力のなさを根拠にエンゲルスを誹謗しています（＊３）。

このように、不破さんには、**「おのおのの命題を、（α）歴史的にのみ、（β）他の諸命題と関連させてのみ、（γ）歴史の具体的経験と結びつけてのみ、考察する」**という観点が欠落しています。不破さんの文章を読む時は、この点にも十分気をつけて下さい。

（＊１）上記の文章の全文は、ホームページ５「温故知新」→ 5-3「レーニンの考えの紹介」→ 5-3-A-1.「１、科学的社会主義の理論」の「1-24-2」にあります。是非、お読み下さい。

（＊２）詳しくは、ホームページ 4-19「☆不破さんは、マルクスが 1865 年に革命観・資本主義観の大転換をしたという、レーニンも気づかなかった大発見を、21 世紀になっておこない、マルクスの経済学をだいなしにしてしまった。」を、是非、お読み下さい。

（＊３）詳しくは、ホームページ 4-8「☆不破さんは、「プロレタリアートとブルジョアジーの対立」は「資本主義の発生の時点から」あるのに、事態の発展のなかで明るみに出るのは矛盾だと、自分の理解力のなさを根拠にエンゲルスを誹謗している。」を、是非、お読み下さい。

５、「分配」をめぐる〝党史〟と〝レーニン〟の改竄

☆志位さんは、不破さんの受け売りで、61年綱領は、当時「国際的な『定説』とされていた生産物の分配方法を中心としたもの」に基づいているから、誤りだったと言います。

なお、不破さんは、「『資本論』探究〈上〉」で、マルクスの「未来社会論」が、「生産物の分配方式の変化を最大の基準にして未来社会を論じた従来の理論（レーニンが『国家と革命』で理論化）と両立するものでないことにまでは、考えがおよびませんでした。」と21世紀になるまで「61年綱領」の正しさを信じていたことを述べ、続けて「この問題は、日本共産党の綱領を改定した二〇〇三～〇四年に全面的な研究をおこない、その成果に立って党綱領の未来社会の諸規定を一新しました。」（同書、P15）と 2004 年の綱領改定の理由を述べています。

そして、不破さんは、『前衛』2014年1月号で、「レーニンが『国家と革命』で示した未来社会の定式というのは、結局、生産物の生産と分配の仕方がどう変わってゆくかがすべてなのです」と述べ、レーニンが『ゴータ綱領批判』を読み誤って、「生産力の増大に応じて『労働に応じた分配』から『必要に応じた分配』に発展するのが未来社会の発展法則だという定式化をおこなった」と非難します。

しかし、これらは不破さんの科学的社会主義の思想の理解不足からくる思い込みと、そ

れに基づくレーニンに対する誹謗中傷、そして「61年綱領」と「61年綱領」と同一の認識である「国際的な『定説』」の事実を無視した改竄です。

科学的社会主義の思想における「生産物の分配方式」問題の捉え方

☆マルクスは『ゴータ綱領批判』(ドイツ労働者党綱領評注)で「生産物の分配方式」問題の捉え方について次のように述べています。

「……、いわゆる分配について大さわぎをしてそれに主たる力点をおくことは、なんといっても誤りであった。どんなばあいにも、消費諸手段の分配は生産諸条件の分配そのものの結果にすぎないのであって、生産様式そのもののひとつの特徴をなすのは生産諸条件の分配のほうである。たとえば資本主義的生産様式の基礎は、物象的な生産諸条件が資本所有と土地所有という形態で働かざる者たちに分配されている一方、大衆は人格的な生産条件つまり労働力の所有者でしかない、ということにある。生産の諸要素がこのように分配されているからこそ、消費手段の今日のような分配方式がおのずからうまれているのである。」(岩波文庫P39-40)

このように、マルクスは、「経済的土台の変化」こそ必要だとその重要性を強調していますが、マルクスは『資本論』でも同様な考えを強調しており、マルクスもエンゲルスもレーニンも、そして、「国際的な『定説』」も日本共産党の「61年綱領」もまったく共通の認識をもっており、これが科学的社会主義の思想における「生産物の分配方式」問題の常識的な捉え方です。つまり、マルクスもエンゲルスもレーニンも、そして、「国際的な『定説』」も日本共産党の「61年綱領」も、「賃金が上がれば経済が発展する」という「経済的土台の変化」抜きの不破さんの「資本主義発展論」に基づくニセ「理論」のような誤った考えを明らかにすることを、科学的社会主義の思想における「生産物の分配方式」問題として捉えています。

不破さんも、その弟子の志位さんも、このような科学的社会主義の思想における常識さえも理解していません。あるいは、理解していても、自分たちがあらかじめ決めた「結論」にたどり着くために知らないふりをしているのかもしれません。

その「結論」とは、「労働におうじて」と「必要におうじて」は分配問題で、こんな分配問題が「理想社会の一番の目標ということになる」のか、ということです。

「労働におうじて」と「必要におうじて」という言葉の意味

☆それでは、マルクスが『ゴータ綱領批判』で述べ、マルクスもエンゲルスもレーニンも、そして、「国際的な『定説』」も日本共産党の「61年綱領」も使っている「労働におうじて」と「必要におうじて」という言葉は、不破さんの言うような「分配」の問題として使われているのか、一緒に見ていきましょう。

★マルクスは『ゴータ綱領批判』で次のように述べています。

「……これらすべての欠陥を避けるためには、権利は平等であるよりも、むしろ不平等でなければならないだろう。

しかしこのような欠陥は、長い生みの苦しみののち資本主義社会から生まれたばかりの、共産主義社会の第一段階では避けられないものである。権利は、社会の経済的な形態とそれによって制約される文化の発展よりも高度であることは決してできない。

共産主義社会のより高度の段階において、すなわち諸個人が分業に隷属的に従属することがなくなり、それとともに精神的労働と肉体的労働との対立もなくなったのち、また、

労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、生活にとってまっさきに必要なこととなったのち、また、諸個人の全面的な発展につれてかれらの生産諸力も成長し、協同組合的な富がそのすべての泉から溢れるばかりに湧きでるようになったのち――そのときはじめて、ブルジョア的権利の狭い地平は完全に踏みこえられ、そして社会はその旗にこう書くことができる。各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて！(岩波文庫P38-39)

……ワンセンテンス入ったあと、前掲の下記の文章(岩波文庫P39-40)が続きます。

これまで述べてきたことは別にしても、いわゆる**分配**について大さわぎをしてそれに主たる力点をおくことは、なんといっても誤りであった。……」(岩波文庫P38-40)

☆この『ゴータ綱領批判』の文章は、読んで頂けば分かるように、「共産主義社会の第一段階」での「権利」のあり方に対して「共産主義社会のより高度の段階」つまり国家も民主主義も必要でない社会：共産主義社会のより高度の段階での「物」に対する「権利」を主張する必要性のなさを「必要に応じて」という言葉で表現したもので、このあとで触れる『資本論』の中の〝必然性の国〟と〝自由の国〟との関係を述べた有名な文章の最後のことば：「労働日の短縮こそは根本条件である」という言葉の「根本条件」が満たされた状態を述べたもので、〝唯物史観〟の未来論そのものを述べたものです。だから、志位さんが「記念講演」で述べた「生産物が人間の欲望を超えてありあまるほど分配されることが、理想社会の一番の目標ということになる」などという次元の低いことを述べたものではありません。志位さんは、正真正銘のバカなのか、それとも、党員みんながバカだとおもってだまそうと思っているのか、そのどちらなのだろうか？

志位さんは、不破さんの受け売りではなく『国家と革命』を真摯に読むべきだ

☆志位さんは、学生時代から「理想社会の一番の目標」は「おいしいものが腹いっぱい食べられる社会ということか」などと議論しただけあって、今ある日本の資本主義の矛盾の暴露などそっちのけで「賃金が上がれば経済は発展する」と労働者を騙し続けていますが、まわりの共産党員に、あなたは二十一世紀になるまで、「科学的社会主義の思想」の「理想社会の一番の目標」は「生産物が人間の欲望を超えてありあまるほど分配されること」だなどと思っていましたか、と聞いてみたらどうか。

この、「生産物が人間の欲望を超えてありあまるほど分配されることが、理想社会の一番の目標ということになる」という「レーニンの『国家と革命』に由来する『定説』」なる作り話は、不破さんが二十一世紀になって、2003 ～ 2004 年頃に創作が完成し、日の目をみたもので、志位さんはそれを受け売りしているだけです。もっとも、志位さんは、学生時代から「理想社会の一番の目標」は「おいしいものが腹いっぱい食べられる社会ということか」などと議論していたというのだから、二十一世紀になるまで「綱領」が明らかにしている「共産主義のたかい段階」では「真に平等で自由な人間関係の社会が生まれる」という〝共産主義者〟なら誰でも心に描いている未来社会を心に描ことなく「共産主義社会」をめざして活動してきたと思われるが、恐ろしいかぎりです。

それでは、不破さんに濡れ衣を着せられたレーニンの『国家と革命』は〝未来社会〟をどのように展望していたのか、一緒に見てみましょう。

★レーニンは、『ゴータ綱領批判』も踏まえ『国家と革命』で、「民主主義を**徹底的に**発展させること、このような発展の**諸形態**を探しだすこと、これらの形態を**実践によって**点検すること等々、すべてこうしたことは、社会革命のために闘争するという任務を構成す

るものの一つである」（国民文庫 P113）と述べ、社会革命と民主主義との切っても切れない関係について述べるとともに、「エンゲルスは、習慣（人間は、暴力なしに、服従することなしに社会生活の根本的な諸条件をまもる習慣――青山）のこの要素を強調するために、新しい**世代**についてかたっている。新しい世代が、『新しい自由な社会状態のもとに成長してきた一世代が、ついに国家の』――民主的共和制をもふくめたあらゆる国家の――『がらくたをすっかりなげすててしまえるときがくるだろう』」（同上 P119）とエンゲルスを引用して述べ、続く「第 5 章 国家死滅の経済的基礎」で、マルクス・エンゲルスを引用しながら「未来社会」について、「共産主義社会の第一段階」＝「過渡期」＝「社会主義社会」は「あらゆる点で旧社会の母斑のくっついている」共産主義社会であるが、「すべての人が社会的生産を自主的に管理することをまなび」「生産力の巨大な発展」を図ることによって、「国家の完全な死滅の経済的基礎」が築かれ、**「精神労働と肉体労働との対立」もなくなり、「自由の国」＝「共産主義社会の高い段階」に到達することを述べ、共産主義社会への展望を示しています。**

☆不破さんはエンゲルスには「過渡期論」が無いと言い、『国家と革命』と『空想から科学へ』は「マルクスの未来社会像の核心」を欠いていると言い、レーニンは「生産力の増大に応じて『労働に応じた分配』から『必要に応じた分配』に発展するのが未来社会の発展法則だという定式化をおこなった」、「レーニンが『国家と革命』で示した未来社会の定式というのは、結局、生産物の生産と分配の仕方がどう変わってゆくかがすべてなのです」（『前衛』No904：2014年1月号）と揶揄しています。

しかし、ここに抜粋し、要約した『国家と革命』に書かれている内容の一部を読んでいただくだけでも、不破さんの言っていることが、まったくの濡れ衣であることがわかると思います。

不破さんは、「生産力の増大に応じて『労働に応じた分配』から『必要に応じた分配』に発展する」未来社会の「すべて」を「生産物の生産と分配の仕方」の変化としか見ることができません。「生産力の増大に応じて『労働に応じた分配』から『必要に応じた分配』に発展する」未来社会とは、「国家の完全な死滅の経済的基礎」が築かれ、「精神労働と肉体労働との対立」もなくなり、「自由の国」＝「共産主義社会の高い段階」に到達した社会のことなのです。これが、唯物史観を基礎に置く科学的社会主義の思想が想定する未来社会です。

不破さんのニセ「未来社会論」が見落とされてきたのはレーニンとエンゲルスのせいだという

☆不破さんは、不破さんが発見（捏造）したニセ「未来社会論」が、「百年以上も」「ほとんど誰からも注目されず、見落とされてきた」「その最大の原因は、レーニンがその著作『国家と革命』で展開した議論にありました」と言ったかと思うと、マルクスの未来社会論をエンゲルスが『資本論』の第三部第七篇第四八章の「三位一体的定式」の文章のなかにうめこんだために「多くの方々が気づかなかったのではないか」とエンゲルスの編集を責めたてます。

しかし、不破さんが発見（捏造）したニセ「未来社会論」の根拠になる『資本論』の第三部第七篇第四八章の有名な文章の最後のことば：「労働日の短縮こそは根本条件である」という言葉は、当時共産党常任幹部会委員・教育局長の小林栄三氏が監修した 1977 年刊

行の『科学的社会主義〈下〉』の「第三節共産主義社会の実現」の「1 共産主義社会の二つの段階について」という「項」で、「社会と人間の発展にとって『労働日の短縮こそ』が『根本条件』となり、すべての人がゆたかな物質的・精神的生活にもとづいてその個性を十分にのばすことができるようになります。」という文章としで読み込まれ、同書は続けて、『空想から科学へ』を引用しながら共産主義社会においては「人間の社会的行為は、人間自身の自由な行為となり」、「必然の王国から自由の王国への人間の飛躍」によって「真に人間的で自由な発展の歴史の創造」が始まることを述べて、マルクス・エンゲルスの唯物史観に基づいた未来社会の展望を示しています。

このように、『資本論』の第三部第七篇第四八章の有名な文章から不破さんが二十一世紀になってニセ「未来社会論」を発見(捏造)したように「世界の共産主義運動」の担い手たちがニセ「未来社会論」を捏造しなかったのは、不破さんの発見なるものが、科学的社会主義の思想とは相容れない噴飯ものの「珍論」であり、「世界の共産主義運動」の担い手たち全員が馬鹿で気づかなかったからではありません。

不破さんのニセ「未来社会論」の「論拠」の文章

☆まずはじめに、不破さんのニセ「未来社会論」の「論拠」となったマルクスの『資本論』の第三部第七篇第四八章(大月版⑤ P1050-1051)の有名な文章を見てみましょう。ちょっと長くなりますが、辛抱してお読み下さい。

「……しかしまた、一定の時間に、したがってまた一定の剰余労働時間に、どれだけの使用価値が生産されるかは、労働の生産性によって定まる。だから、社会の現実の富も、社会の再生産過程の不断の拡張の可能性も、剰余労働の長さにかかっているのではなく、その生産性にかかっており、それが行なわれるための生産条件が豊富であるか貧弱であるかにかかっているのである。じっさい、自由の国は、窮乏や外的な合目的性に迫られて労働するということがなくなったときに、はじめて始まるのである。つまり、それは、当然のこととして、本来の物質的生産の領域のかなたにあるのである。未開人は、自分の欲望を充たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないが、同じように文明人もそうしなければならないのであり、しかもどんな社会形態のなかでも、考えられるかぎりのどんな生産様式のもとでも、そうしなければならないのである。彼の発達につれて、この自然必然性の国は拡大される。とういのは、欲望が拡大されるからである。しかしまた同時に、この欲望を充たす生産力も拡大される。自由はこの領域のなかではただ次のことにありうるだけである。すなわち、社会化された人間、結合された生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行うということである。しかし、これはやはりまだ必然性の国である。この国のかなたで、自己目的として認められる人間の力の発展が、真の自由の国が、始まるのであるが、しかし、それはただかの必然性の国をその基礎としてその上にのみ花を開くことができるのである。労働日の短縮こそは根本条件である。」〈『資本論』第３巻 第２分冊 大月版 ⑤ P1050-1051〉

★これが、『資本論』に書かれている「必然性の国」と「自由の国」とに関する記述です。

要約すると、

「物(富)がどれだけ生産されるかは生産性の高さにかかっており、生産設備等の進歩にかかっている。「自由の国」は強制されてはたらく必要がなくなったときに、はじめて始まる。つまり、それは、当然のこととして、遠い将来のことである。未開人も文明人も自然と格闘しなければならない。この「自然必然の国」は社会の発展につれて拡大する。この「自然必然の国」での「自由」とは、盲目的な力に支配されていた生産が計画的、意識的におこなわれるようになり、共同的統制のもとに置かれることである。しかし、この「自由」を獲得した**社会主義社会**もまだ「必然性の国」である。この国のかなたで、強制的な労働のない、自分の人間的な能力の発展のみを追求する真の「自由の国」が始まる。しかし、それは、**社会主義社会**という「必然の国」を基礎として、その上にのみ花開くことができる。そのための根本条件は労働日の短縮、つまり、生産性の向上である。」ということをマルクスは述べています。

『資本論』は不破さんのニセ「未来社会論」をきぱりと否定している

☆しかし、不破さんは、このマルクスの〝未来社会論〟の〝自由の国〟とは「自由な時間」＝資本主義社会にもある〝余暇〟のことで、「経済的土台の変化」があっても「自由な時間」がなければ駄目だと、本末転倒な、唯物史観も階級闘争も、へったくれもないようなことを言います。

不破さんが「未来社会論」が述べられている箇所として取り上げた『資本論』も『空想から科学へ』(同前 P71-72 、75)も、「自由の国」とは「自己目的として認められる人間の力の発展が」保障される国、「ただ物質的に十分にみち足りており、日に日にますます豊かになっていく**だけでなく**、肉体的、精神的素質の完全で自由な育成と活動を保障するような生活を、社会的生産によってすべての社会の成員にたいして確保」された国のことで、「それはただかの必然性の国をその基礎としてその上にのみ花を開くことができ」ることを述べており、『ゴータ綱領批判』の先の文章で述べていることと同じことをより詳しく述べているのです。未来社会とは、資本主義的生産様式を変革して、社会主義の過渡期をへて実現される、「ただ物質的に十分にみち足りて」いるだけでなく、「肉体的、精神的素質の完全で自由な育成と活動を保障するような」社会のことです。このマルクスの〝未来社会論〟から、どうして「科学的社会主義の思想」の「理想社会の一番の目標」は「生産物が人間の欲望を超えてありあまるほど分配されること」だなどと思ったり、〝自由の国〟とは「自由な時間」のことで、資本主義社会にもある〝余暇〟のことだなどと思うことができるのか。だれがどう『ゴータ綱領批判』と『資本論』と『国家と革命』とを読み誤っても、不破さんのようなことを言う人は、不破さんをおいてほかにはいないでしょう。不破さん以外にもいたら、ただちに改めてください。

そして、『国家と革命』を真摯な態度で読めば、『ゴータ綱領批判』の前掲の部分が引用されているとともに、社会主義建設での民主主義の発展の重要性について、自覚的な個人の社会への参加の重要性や条件について、「新しい自由な社会状態のもとに成長してきた一世代」について、「社会主義が労働日を短縮し、大衆を新しい生活へひきあげ」ること等について、しっかりと述べられています。だから、『国家と革命』が未来社会を矮小化して、「生産力の増大に応じて『労働に応じた分配』から『必要に応じた分配』に発展するのが未来社会の発展法則だという定式化をおこなった」などと唯物史観に基づいて書かれた『ゴータ綱領批判』で述べられていることの意味もわからず、不破さんのように言

うのは、不破さんの無知をさらけ出すだけで、まったくの誤りであり、恥ずべきことなのです。

「未来社会」についてのマルクス・エンゲルス・レーニンと不破さんとの違い

☆このマルクス・エンゲルス・レーニンと不破さんとの「未来社会」論の決定的な違いは二つあります。その一つは、マルクス・エンゲルス・レーニンのように、「国家死滅の経済的基礎」をしっかり見てその発展を通じて「共産主義社会の高い段階」を展望するのか、それとも、不破さんのように、「未来社会では発展の推進力が上部構造に移ってゆく」として「国家死滅の経済的基礎」を「あまりうらやましくない」と言って捨て去るのかの違いです。そして二つ目は、不破さんのように「指揮者はいるが支配者はいない」といういわゆる「社会主義社会」を「未来社会」として捉えるのか、マルクス・エンゲルス・レーニンのように「精神労働と肉体労働との対立」もなくなり、「諸個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり」、恒常的な「指揮者」などいない「自由な結合的労働」の社会を「未来社会」として捉えるのかの違いです。

これらの違いは、マルクス・エンゲルス・レーニンのように科学的社会主義の思想に基づいて世界を見るのか、それとも、不破さんのように二十一世紀になって発見した付け焼き刃の淺知恵で世界を見るのかによってもたらされたもので、マルクス・エンゲルス・レーニンの〝未来社会像の核心〟を欠いているのが、ほかならぬ不破さんであることを明らかにしています。

※これまでの論究での不破さんの発言の出所及び論究の詳しい説明は、ホームページ AZ-2-2「『資本論』刊行 150 年にかこつけてマルクスを否定する不破哲三氏(その２)」、ホームページ AZ-2-3「『資本論』刊行 150 年にかこつけてマルクスを否定する不破哲三氏(その 3)」、ホームページ 4-12「☆不破哲三氏によるレーニンの「記帳と統制」の概念の歪曲」、ホームページ 4-16「☆不破さんは、エンゲルスには「過渡期論」が無いと言い、『国家と革命』と『空想から科学へ』は「マルクスの未来社会像の核心」を欠いていると誹謗・中傷する」、ホームページ 4-18「☆「人間の発達」は資本主義を社会主義に変え、生産力を発展させなければ保障されない」及びホームページ 4-20「☆「社会変革の主体的条件を探究する」という看板で不破さんが「探究」したものは、唯物史観の否定だった」を参照して下さい。

６、資本の行動と現実の経済を見ない、資本を免罪し全ての罪を政治になすりつける「新自由主義」暴走論

☆志位さんは、「2000年代の時期は、経済政策では、新自由主義の暴走がさらに顕著になりました。『構造改革』の名のもとに社会保障費の自然増削減、労働法制の規制緩和が強行されました。」「日本は、世界でも例外的な『賃金が上がらない国』『成長できない国』」に「転落し、出口の見えない深刻な危機に陥っている」といいます。そして、この危機は「新しい政治を生み出す『夜明け前』」で「政治のゆがみを根本からただす綱領をもつ日本共産党を躍進させてこそ、『夜明け』は現実のものになる」と言って（拍手）を受けています。

（拍手）をした人に聞きたい。あなたが、こんなことを言って、それを聞いた人が「日本共産党」を躍進させたいという気持ちになると思いますか。

〝こんなこと〟とは、今の日本が「出口の見えない深刻な危機に陥っている」原因も言わず、志位さんは選挙演説で「自民党政治を大本から変えるという大目標を背負っている。ただ、今度の選挙でそれを目指すのはちょっと早いですね」と言って「自民党政治を大本から変える」政策の提起を放棄しておきながら、「日本共産党」は「政治のゆがみを根本からただす綱領をもっている」から「日本共産党」を躍進させてください、と言うことです。

なぜ、自民党が新自由主義の政策を行なうのか。それは、故大瀧雅之東大教授が「日本は失業と利潤を輸入し、雇用機会と資本を輸出していたわけである」（岩波新書『平成不況の本質』）と述べているように、資本が国民の富と雇用を海外に持ちだし「産業の空洞化」を押し進め、労資の力関係を資本優位にするとともに国内投資を抑制して「資本装備率の低下」をもたらし生産性を低下させ、不安定雇用と低賃金をもたらす環境を資本がつくったからです。その結果、年金、医療を含む社会保障全般の危機をもたらすこととなり自民党は「新自由主義」の政策をもってその解決をはかりました。「自民党の新自由主義の政策」は、その主人である資本の「産業の空洞化」策の結果を資本に有利なように「解決」するための「施策」なのです。

エンゲルスは『資本論』第 3 巻の序文で、「マルクスによって 1845 年になされた**『どこでもいつでも政治的な状態や事件はそれに対応する経済状態によって説明される』**という発見。」と述べていますが、資本の行動と現実の経済から目を背けさせ、資本を免罪し全ての罪を「政治」になすりつける志位さんの「新自由主義」暴走論に騙されてはいけません。

志位さんは、「自民党政治を大本から変えるという大目標を背負っている。ただ、今度の選挙でそれを目指すのはちょっと早いですね」と言い、「賃金が上がれば経済は発展する」などといって労働者を騙しておきながら、「未来社会論」のところで、2020 年綱領について、「高度な生産力、経済を社会的に規制・管理するしくみ、……青山の略……、未来社会の壮大な展望を明らかにしました。」と〝天国〟を語っています。しかし、今ある日本の困難を解決するためには「未来社会」ではなく、今、生産性を高め「産業の空洞化」を回復するためにグローバル資本の行動を「社会的に規制・管理する」方策を提起することこそが求められています。そして、この取り組みは、労働運動のなかで〝経済は社会のため国民のためにある〟という社会をつくるためには企業が社会に奉仕する存在となる必要があり、そのためには企業が資本の支配から解放され、労働者を構成員とする真のステークホルダーによって運営される必要があるということを労働者階級の共通認識にすることと、一体不二のものとしてたたかわれなければなりません。

社会主義社会は、資本から企業の経営権を奪い取った、資本が資本主義社会で付与された特権を剥奪した社会ですが、私たちが資本主義社会から志位さんの言う「未来社会」へ行くためには、資本から企業の経営権を奪い取ることの正当性を労働者階級がたたかいを通じて共通認識にすることが必要で、共産党にはそのためのたゆまぬ努力が求められています。資本主義社会はルールある資本主義が必要で、「未来社会」は天国のような社会だなどといったところで、ごく一部の信者以外は「輝き」も「魅力」も感じることはできないでしょう。

７、「60年代の初心」を捨て去り、「資本主義発展論」の種を蒔く不破さんと志位さん

☆二十一世紀になって、科学的社会主義の思想を完全に捨て去り、「資本主義発展論」の欠片を撒き散らしている志位さんが「1960 年代の初心にたって、党づくりに取り組むことを、また党づくりへのご協力を、心から訴えたいと思います。」と言うのですから驚きです。党員や支持者に「60 年代の初心」にたつことを訴えるのなら、〝60 年代の初心〟とは何だったのかを、志位さん自身がしっかりと捉えなければなりません。（もっとも、学生時代から「理想社会の一番の目標」は「おいしいものが腹いっぱい食べられる社会ということか」などと議論し、二十一世紀になるまで解決できなかったような人に〝60 年代の初心〟とは何だったのかをしっかりと捉えろと言っても無いものねだりかもしれませんが。）

日本共産党は、当時、「三十万近い党員と百数十万の機関紙読者をもって」むかえた 1966 年の第十回党大会で、党は「強固な数十万の大衆的前衛党を建設する」ために「①マルクス・レーニン主義（科学的社会主義）を学び、綱領の総路線を堅持し、あらゆる党破壊とたたかって強じんな党を建設する、②情勢と大衆の状態に機敏に反応して、政策を大量に宣伝してたたかい、基本的大衆組織を拡大強化する、③持続的に党勢を拡大し、読者を尊重する、」を含む六つの「課題にとりくむことを全党に義務づけ」ました。（『日本共産党の六十年』P234）

志位さんが「初心にたつ」というなら、①と②は欠くことのできない前提条件です。②の情勢にかみあった「赤旗」号外の戸別配布は皆無で、労働組合運動を抜本的に強化する姿勢など微塵も見られませんが、その主要な原因は①の「マルクス・レーニン主義（科学的社会主義）を学び、綱領の総路線を堅持し」ということの欠落にあります。不破版「2004 年綱領」は当時の「綱領の総路線」をかなぐり捨てて、不破さんの「資本主義発展論」に基づく「ルールある資本主義社会」づくりを最終目標として、「未来社会」についての念仏を唱えるものとなり、労働者の闘うエネルギーを引き出すことを妨げるものとして、不破さんの長年の念願をかなえるものとなりました。

それでは、当時の「綱領の総路線」とはどのようなものか、一緒に見てみましょう。

当時の「綱領の総路線」

☆1961年7月27日に第八回党大会で採択された〝党綱領〟は、まずはじめに、〝日本共産党〟が〝日本労働者階級の前衛によって創立された〟こと、そして、〝ブルジョア民主主義革命を遂行し、これを社会主義革命に**発展転化**させて、社会主義日本の建設にすすむという方針のもとにたたかってきた〟ことを述べています。

そして綱領は、「日本の当面する革命は、アメリカ帝国主義と日本の独占資本の支配――二つの敵に反対するあたらしい民主主義革命、人民の民主主義革命である」と革命の性格を述べ、当面する行動綱領として、「党は、日米支配層が労働者、農民、その他の勤労人民にくわえている搾取と収奪に反対し、…青山の略…、人民大衆の生活を根本的に改善するために努力する。」「党は、アメリカ帝国主義と日本の独占資本の財政経済政策に反対し、**経済の自主的平和的発展のためにたたかう**。…青山の略…。日本経済にたいするアメリカ資本の支配を排除するためにたたかい、アメリカ資本がにぎっている**企業にたいする人民的統制**と国有化を要求する。…青山の略…。**独占資本にたいする人民的統制**をつうじて、独占資本の金融機関と重要産業の独占企業の国有化への移行をめざし、必要と条件におうじて一定の独占企業の国有化とその民主的管理を提起してたたかう。」ことを明ら

かにし、これらの要求を実現するために「労働組合、農民組合をはじめとする人民各階層の大衆組織を確立し、」「労働者階級の指導のもとに、労働者、農民の同盟を基礎とし」て「民族民主統一戦線をつくりあげる」ことを明記し、そのために、「とくに労働者階級をマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の思想でたかめ、わが国の民主革命の勝利と社会主義の最後の勝利を確信させ、その階級的戦闘性と政治的指導力をつよめる」ことが必要であることがのべられています。

そしてこの〝あたらしい、人民の民主主義革命〟について、「独占資本主義の段階にあるわが国の当面の革命はそれ自体社会主義的変革への移行の基礎をきりひらく任務をもつものであり、それは、資本主義制度の全体的な廃止をめざす社会主義的変革に急速にひきつづき発展させなくてはならない。すなわちそれは、独立と民主主義の任務を中心とする革命から連続的に社会主義革命に発展する必然性をもっている。」と明確に述べています。

そして最後に、志位さんが、不破さんの受け売りで、61年綱領は、当時「国際的な『定説』とされていた生産物の分配方法を中心としたもの」に基づいており、生産物の分配方法を「理想社会の一番の目標」としていたなどとデマを浴びせかた「61年綱領」は次のように結んでいます。

〝社会主義社会は共産主義社会の第一段階である。この段階においては人による人のいっさいの搾取は根絶され、階級による社会の分裂はおわる。…青山の略…。共産主義のたかい段階では、生産力のすばらしい発展と社会生活のあたらしい内容がうちたてられるとともに、人間の知的労働と肉体労働の差別が消えさるだけでなく、「各人は能力におうじてはたらき、必要におうじて生産物をうけとる」ことができるだろう。組織的、かつ系統的な暴力、一般に人間にたいするあらゆる暴力は廃絶される。**こうして、原則としていっさいの強制のない、国家権力そのものが不必要になる共産主義社会、真に平等で自由な人間関係の社会が生まれる。**〟

★志位さんは、学生時代から「理想社会の一番の目標」は「おいしいものが腹いっぱい食べられる社会ということか」などと議論したとのことですが、〝理想社会の一番の目標〟が何であるかは綱領を読めば誰でも分かることですが、入党するに当たっても、専従になるときも、幹部会委員長になるときも、一度も〝日本共産党綱領〟を読まなかったのでしょうか。

労働運動を元気にしたいなら、〝60年代の初心〟を思い出して「2020年綱領」を破棄せよ

☆1961年の第八回党大会で採択され、その後若干の字句の修正はあったが、2004年まで共産党員の思想であり行動の指針であった〝日本共産党綱領〟（以降〝日本共産党綱領〟という）は、先ほど見たように、「労働者階級をマルクス・レーニン主義（後に、「科学的社会主義」と字句修正した）とプロレタリア国際主義の思想でたかめ、わが国の民主革命の勝利と社会主義の最後の勝利を確信させ、その階級的戦闘性と政治的指導力をつよめ」、これらの要求を実現するために「労働組合、農民組合をはじめとする人民各階層の大衆組織を確立し、」「労働者階級の指導のもとに、労働者、農民の同盟を基礎とし」て「民族民主統一戦線をつくりあげる」ことを通じて〝あたらしい、人民の民主主義革命〟を実現することを明記しています。

しかし、「2004 年綱領」は、その冒頭で「科学的社会主義を理論的な基礎とする政党として、創立された」ことを述べていますが、科学的社会主義にとって肝心かなめの労働者

階級の役割について、「労働者階級」という言葉が二カ所に出てきますが、その歴史的使命とのかかわりで使用されているわけではなく、「党」が戦前に「労働者階級の生活の根本的な改善」の「ためにたたかった」ことと、「労働者階級」が「独立、平和、民主主義、社会進歩のためにたたかう世界のすべての人民」の一員として数えられているだけで、革命の主体としての〝労働者階級〟の存在と役割を消失させています。

「60 年代の初心にたって」科学的社会主義の党に立ち返るというのなら、ただちに「2020 年綱領」を改め、労働者階級がその役割にふさわしい「階級的戦闘性と政治的指導力」をつよめることができるような資本主義の暴露と政策的な援助、そして、それにふさわしい党員の学習・教育を徹底すべきです。

※「2004 年綱領」についての詳しい説明は、ホームページ 3-3-1「『2004 年綱領』にみる不破哲三氏の転落の証明」を、「2020 年綱領」についての詳しい説明は、ホームページ 3-3-2「『2020 年綱領』を克服して、共産党よ元気をとりもどせ!!」を、是非、参照して下さい。

☆〝日本共産党綱領〟は、〝あたらしい、人民の民主主義革命〟をめざす当面のたたかいにおいても、「独占資本主義の段階にあるわが国」では、経済の自主的平和的発展のためには**独占資本にたいする人民的統制が必要である**ことを明らかにし、〝あたらしい、人民の民主主義革命〟と〝社会主義革命〟とはシームレスにつながっており民主主義革命から社会主義革命へと「連続的にに発展する必然性をもっている」ことを明確に述べています。

いままさに、日本は「産業の空洞化と資本装備率の低下」によって、異常な物価高にもかかわらず政府も日銀も打つ手がありません。資本を民主的にコントロールしてこの「産業の空洞化と資本装備率の低下」を改める以外に日本経済の発展と豊かな国民生活を実現する道はありません。そしてそれは、志位さんが「自民党政治を大本から変えるという大目標を背負っている。ただ、今度の選挙でそれを目指すのはちょっと早いですね」と言って否定していることを、明確に、否定することです。現在のように、不破さんの「資本主義発展論」に基づいて「賃金が上がれば経済は発展する」と自民党と同じことを言って、「自民党政治を大本から変える」ことを拒んでいては、若者は自民党を支持し、政治も経済もよくならないし、労働者に闘うエネルギーが高まらないのは必然です。

☆いまは「よりましな政府」をみんなでつくるのだからと、社会主義社会に通じる道以外に日本経済を再生させるみちなどないのに、「ちょっと早い」などと言っていてはダメです。第一生命経済研究所の長濱氏などマスコミを賑わしている資本主義経済の擁護者達でさえ、彼らなりの言葉で、日本の「産業の空洞化と資本装備率の低下」の回復こそが現在の日本経済再生の道であることを言わざるをえなくなってきています。

同時に、私たちがしっかり理解し確認しておかなければならないのは、支配階級もダボス会議において、企業統治のあり方について、従業員や社会、環境にも配慮した『ステークホルダー(利害関係者)資本主義』を語らざるをえないような、そういう資本主義の危機の時代に私たちはいるということです。日本共産党は1946年に提案した「憲法草案」の第三十一条で「被雇用者は企業の経営に参加する権利をもつ。」とうたっています。共産党は労働者階級が企業の主人公になって社会全体の民主主義を支える、官僚主義も独裁者も生まれる余地のない、本当の〝民主〟国家をつくるための「階級的戦闘性と政治的指導力をつよめる」ような援助を積極的に行わなければなりません。

「60 年代の初心にたって」科学的社会主義の党に立ち返るというのなら、ただちに「2020

年綱領」路線を改め、現実に或る困難を克服するために資本主義を暴露し資本主義を変えるための革命運動の展望をしっかりと示すべきです。
※なお、労働者が闘うエネルギーを高めることができない理由については、ホームページ3-3-8「日本の労働運動が元気が出ないのはなぜか」も、是非、ご覧ください。

総括

☆この志位さんの「党創立100周年記念講演」を読んで思ったのは、志位和夫という人は『ゴータ綱領批判』も〝日本共産党綱領〟も「４・29論文」もまったく読んでいないのか、読んだがまったく理解できなかったのか、それとも、稀代のペテン師なのか、そのいずれなのだろうかということです。

これまで見てきたように、「４・29 論文」は『国家と革命』を執筆したレーニンを擁護して毛沢東一派の誤りを厳しく糾弾し、〝日本共産党綱領〟は目標とする共産主義社会について「おいしいものが腹いっぱい食べられる社会」などではなく「真に平等で自由な人間関係の社会」であることを明確に述べています。そして、『ゴータ綱領批判』の「各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて！」という文章も、すでに見てきたように、唯物史観に基づいて、「労働に応じて」という狭い「権利」の概念が克服された社会のことを述べているということ、そしてそれは、ちょっと注意して読めば誰にでもわかるはずであるということを私たちは確認してきました。

しかし、志位さんは「記念講演」でレーニンの『国家と革命』を引き合いにだして反共文筆家なみの誹謗中傷を〝日本共産党綱領〟にくわえることによって、〝日本共産党綱領〟が持っていた「労働者階級」が「階級的戦闘性と政治的指導力をつよめ」て社会を変革するという科学的社会主義の党の革命論も独占資本の横暴を暴露し規制する民主的変革を社会主義社会に発展させていくという科学的社会主義の党の運動論も葬り去り、民主主義と社会主義を「水」と「油」のように捉えて、資本主義内でのカッコつきの「民主主義」の実現に党員と労働者階級の意識とたたかうエネルギーを封じ込めるという不破さん譲りの演説をおこないました。

志位さんが、必要な文献をまったく読んでいないのか、読んだがまったく理解できなかったのか、それとも、稀代のペテン師なのか、という判断はみなさんにお任せしますが、「講演」の合間々々に（拍手）があり、「講演」の最後に（大きな拍手）があったのが残念でなりません。この「党創立100周年記念講演」を読んで私が得たのは、「共産党」は、もう本当に、だめなのかもしれないという深い失望感でした。

しかし、最後にこれだけは申し上げます。「産業の空洞化と資本装備率の低下」を復元しなければ、日本は沈没します。